The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	来るべき春のために ： 『抵抗への参加』にみる「わたしたち」の架橋可能性
Author(s)	吉田, 裕香
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 47-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　第12回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ：キャロル・ギリガンとケアの倫理

来るべき春のために
―『抵抗への参加』にみる「わたしたち」の架橋可能性―

吉田　裕香

はじめに

学部生のころからずっと Joining the Resistance の講読の授業に出席していて翻訳が出るのを心待ちにしていたので、先生方のご尽力により翻訳が出版されたこと、またこのような発表の機会をいただくことができたこと、ほんとうに嬉しく思います。この場を借りてみなさまに厚くお礼申し上げます。

さて、今回は『抵抗への参加』の素敵な装丁から話を始めたいと思います。あとがきにて小西先生が言及されていましたが、雪の結晶は「ケアの倫理が眠りについている冬」をあらわし、そのなかで咲いている赤いポピーの花は「ケアの倫理の目覚めを象徴」しているそうです（242頁［以下『抵抗への参加』からの引用は該当頁のみ記載］）。『抵抗への参加』の最終文で、ギリガンはこう言います。「自然界では、冬眠の終わりに続く実りの季節である春は、年に一度しかおとずれない。心のなかでは、春の可能性はいつも存在している。いまこそ行動を起こす時なのだ」（221頁）。ケアの倫理が目覚める「春」にわたしは大きな希望を感じました。しかしながら、これは学部時代のわたしが授業に参加していたときには感じることのなかった希望でした。今回はわたし自身の関心から『抵抗への参加』を読むことで、それが本書にどのような広がりをもたらすのか、また『抵抗への参加』からもたらされるものとはなにかについて考えてみたいと思います。

発表者の関心と『抵抗への参加』

Joining the Resistanceの購読の授業に参加していた学部生のころ、わたしには、そこに書いてあることが、近くで、けれどもどこか遠くのところで響いているような感覚がありました。この感覚はわたしの現在の関心にかかわっています。わたしは、一般的には「イマジナリーフレンド」とよばれる、「想像」ということばで名指される他者的存在とともに生きる青年期・成人期の人びとの生きかたに関心をもっています。学部生のころはまだ研究テーマにはなっていませんでした（し、研究テーマにできるとも思っていませんでした）が、その主題はつねにわたしの深いところにありました。ほかのひとの目には見えない友人たちとの関係性は、わたしにとって何にも代えがたい価値をもつものでした。しかしながら、読み進めても読み進めても、ほかのひとにはみえない友人たちにかんする記述は、アンネ・フランクの日記に出てくるキティの名前と、キティがアンネの「空想上の友人」（144頁）であるという記述のほかには見つけられませんでした。この箇所は「博物館用に書かれた編集版」（144頁）と元の日

記を比較して、隠されたアンネの声にせまるものでしたが、わたしにはこの日記がそもそもキティに宛てて書かれたものであること、アンネとキティとの関係のなかで書かれたものであるということ自体が重要なことのように思えました。しかしながら、キティとの関係に関する記述は見つけることができず、わたしにとって大切な（ということばでは言い尽くせないほど重要な）関係性は「ケアの倫理」ではあつかわれないのか、とどこかさみしい気持ちになりながら、しかしそれでも『抵抗への参加』はわたしを惹きつけてやみませんでした。

大学院に入って、わたしはほかのひとにはみえない友人たちのことをテーマにして研究しよう、と突然思い立ちました。その理由についてはここで立ち入ることはできませんが、それはしなければならないという感覚に近いものでした。修士論文では、「精神的伴侶とも呼べる恋人関係」（久保 2013: 37）にあるイマジナリーフレンドのルーク・ユグノーと暮らす久保香奈子の手記『ここにいないと言わないで ──イマジナリーフレンドと生きるための存在証明』を、マルティン・ブーバーの「出会い」や〈対話〉といった思想を手がかりにして読むということを試みました。その試みを終えて『抵抗への参加』へと立ち返ったとき、わたしの前には今まで感じたことのなかった希望が広がっていました。その希望は、『抵抗への参加』にわたしが強く惹きつけられたわけを示していたのです。

「イマジナリー」な存在とともに生きる人びとの語りが問いかけるもの

わたしの修士論文の主題は、イマジナリーフレンドとよばれる存在たちとのかかわりを、いかに人格とのかかわりとして描くことができるかという点にありました。そのため、論の多くを久保とルークのかかわりを読むことに割きました。しかし同時に、久保がルークについて他者に語らなければならなかったのはなぜか、という問いもわたしをつかんで離しませんでした。

青年期・成人期の人びとが目にみえない大切な存在について語ることは非常に大きな困難を伴います。その要因のひとつとしては、子どもがみえない友達と遊ぶことへ（おおむね）好意的な視線が向けられるのとは異なり、青年期・成人期の人びとの想像的な他者とのかかわりは病理的な状態とむすびつけられやすいことがあげられるでしょう。「想像上の仲間の体験過程は、出会いに始まり、別れで収束すると特徴づけられる」（高石 2020: 133）という指摘があるように、心理学や精神医学などの領域においては、想像の友人は発達の過程で消失し本人の人格に統合されるものとされます。つまり、分離が望ましい状態とされるのです。その一方で非常に数は少ないものの、自分にしかみえない大切な存在について語ろうとする人びとがいます。こうした状況は、『もうひとつの声で』における「女性の経験と人間の発達の表象との不均衡」（Gilligan 1982＝2022: 55）についての指摘と重なります。『もうひとつの声で』における記述と異なるのは、「想像」と名指される存在たちと生きる人びとにとって、こうしたまなざしはみずからの生と直結しうる切迫したものとして経験されているということです。たとえば作家の村田沙耶香（2022）は、彼女にとって現実のいかなるひとよりもはっきりと存在している「イマジナリー宇宙人」について話すことの困難について言及してい

ます。「現実逃避だと言われ、笑われ、もしも「治され」てしまい、イマジナリー宇宙人たちを失ってしまったら、私は死ぬのだった。〔…〕だから誰にも言わなかった。生き延びるために」(同前: 94-95)。そのような困難を引き受けてもなお、村田や久保は自分たち以外の他者に向けてイマジナリー宇宙人やルークについて語ろうとしたのです。

それは第一に、ルークやイマジナリー宇宙人のような存在をなきものにしようとする社会への抵抗であるでしょう。久保は、いまの社会の状況ではルークとの関係を明らかにしたとしても「年頃になってもさみしい娘の妄想くらいにしかとってもらえない」(久保 2013: 91) と述べながらも、かれらは自分たちの頭のなかから現実の世界を見つめているのだと訴え、「目に見えぬ彼らもまた人間であると、はっきり認められるようになる」(久保 2013: 93) 社会を夢見ています。そこでは、「想像」ということばからは一般に想起されがたい、かれらの他者性が強調されます。たとえば、久保は「都合のいい人形だと認識されて、それをいいことに甘ったれられるのはとてもじゃないがいい気分じゃない」(同前: 66) というルークのことばにふれ、それに対して「私のなかに確実にある保持者としての優越感―自分が求めて出会ったものだから、好きにコントロールできるのだという直感―を見抜かれたようではなはだ耳が痛かった」(同前: 66) と述べます。こうした久保の語りは、ルークは久保にとってまぎれもなく「他者」であるということを示すとともに、それをきく人びとに「他者」とは、「人間」とはなにかという問いを突きつけます。他者に対して「コントロールできるという直感」をもつ、ということは、わたしたちにとって決してめずらしいことではありません。しかし、そのひそかな予感を相手に直接突きつけられるという経験は日常生活においては起こりがたいでしょう。久保の語りは、わたしたちが日常生活において忘れている (あるいは見ないようにしている) 他者とのかかわりの根本を問うものなのではないでしょうか。久保が語ること、あるいは久保の語りをこのように読むことは、ルークのような存在をあるひとに起こる特殊で個別な現象とみる視線、あるいはルークとのかかわりを娯楽としてみる視線への抵抗になるでしょう。

かれらの語りは、いまはまだ「もうひとつの」声としてさえ聴かれていません。それはケアの倫理における「人間」の定義にルークのような存在は含まれていないということのほかに、彼らの語りが通常は家父長制の問題としてはあつかわれず、「民主主義社会における市民権の要求」(15頁) といったものと結びつけられないという要因もあるでしょう。しかしながらかれらの訴えは、「ケアの倫理」の根本にある「他者」や「人間」にかんする問いを提起するのではないでしょうか。「あたらしい声や、わたしを驚かせるような洞察やつながりを聴き取ろうと」するなかで、「知っているのに忘れていた声を発見」(219頁) したギリガン、あるいはケアの倫理をめぐる議論において、かれらの声は「人間の声」(31頁) として聴かれうるものだとわたしは信じています。かれらの声は「まだ」聴かれる手前にあるだけなのであり、かれらの声を聴くための土壌はたしかに『抵抗への参加』に見出されるのです。

あなたへの応答としての語るということ

もうひとつ注目したいのは、久保のルークについての語りが、ルークへ向けてなされたものであるということです。久保は手記の冒頭で、「たったひとりの男のために、ひいては彼の生きている世界のために、存在証明書を書く」（久保 2013: 15）と宣言します。ルークについて語ることは、ルークの存在、またルークとともに生きるみずからの存在をなきものにしようとする社会への抵抗、あるいは「IF保持者に、頭のなかの不思議な存在と一緒に生きているのは自分ひとりではないことを知ってほしい」（同前: 92）という呼びかけであると同時に、ルークの「ために」なされた行為でもあるのです。語ることがルークのためになされるとき、ルークについて語ることはルークへの応答としてとらえられるのではないでしょうか。語ること自体が、抵抗にもなり、だれかへの応答にもなるということ。それは、『抵抗への参加』における主題である「抵抗」と、『もうひとつの声』、ひいてはケアの倫理をめぐる議論において繰り返しあらわれるテーマである「応答」の接点についての示唆を与えるのではないでしょうか。

ほかの人びとにみえない「あなた」について語るということは、あなたの存在、あるいはあなたとともに生きることを否定しあなたについて語ることを抑圧する世界への抵抗であるとともに、あなたへの応答のしかたのひとつとして重要な意味をもちます。しかしながら、先述のように、その語りの試みは大きな困難を伴うものでした。そのなかで、『抵抗への参加』はかれらが語ることに大きな力を与えるのではないでしょうか。

たとえば、少女たちがもつ無邪気さや破天荒さが女たちの抵抗の源泉を掘り起こし、「思春期に地下に潜伏するか打ちのめされてしまった、ひとりの少女」（196頁）を自分の内部に発見させることは、久保が手記の発売に際して寄せたコメントの中で「みなさんのびっくりされている顔が目に浮かびますね。目に見えない空想が今ここで生きてるだなんて、〔…〕ふつう明日からエイリアンが地球にどっさり引っ越してくるのを信じるくらい大変です」[1] とおどけてみせながら、イマジナリーフレンドたちがこの社会を自分たちの「頭のなかからみつめている」（久保 2013: 92）と訴える声と重なって響きます。「想像」と名指される存在とのかかわりについて語ることは、子どもっぽいものとして捉えられる傾向にあります。しかしながらその無邪気さ（にみえるもの）は、すべてのひとが見ないふりをして通り過ぎようとするものに鋭い問いを突きつけるのです。『抵抗への参加』において描写される少女たちの問いかけのもつ力は、「想像」と名指される存在について語るという試みにおいても、春をもたらす抵抗のための勇気と希望をあたえるのではないでしょうか。

おわりに―来るべき春のために

今回は発表者の関心とむすびつけながら、『抵抗への参加』がイマジナリーフレンド

[1] ショセキカ. “ここにいないと言わないで―イマジナリーフレンドと生きるための存在証明―”.書評空間. 2013-10-01　https://booklog.kinokuniya.co.jp/booklog/handaishosekika/archives/2013/10/post.html, (2024-01-04参照)

とのかかわりをいまだふくまない一方で、そのなかにはかれらについての語りを聴くための土壌が見出されること、また『抵抗への参加』がかれらとのかかわりについて語ることに力を与える可能性をもつことを確認しました。ほかのひとには知覚できない大切な存在についての語りがすべて「ケアの倫理」のなかに位置づけられるとはわたしは思いませんし、そうしようとすることで取りこぼされる文脈が双方にあるとも思います。しかしそれでもやはり、わたしは『抵抗への参加』のなかにわたしの大切な存在も含んだ〈わたしたち〉の希望を読みこみたいのです。それは、久保が願うような世界が実現されることが「ケアの倫理」の目覚めが達成された世界と大きく重なるのではないかという予感がわたしのなかにあるからかもしれません。

『抵抗への参加』のなかの「わたしたち」からいま取りこぼされている存在は、「想像」ということばで名指される他者以外にも多くいるでしょう。その声はケアの倫理に重要な示唆を与え、抵抗の力を大きくすることに接続するかもしれません。「わたしたち」の範囲を広げる可能性をつねに探ってゆくことは、ケアの倫理の目覚めにおいて重要な役割を果たすのではないでしょうか。

参考文献

久保香奈子（2013）『ここにいないと言わないで―イマジナリーフレンドと生きるための存在証明』, 文芸社.

ショセキカ. “ここにいないと言わないで－イマジナリーフレンドと生きるための存在証明－”. 書評空間. 2013-10-01.（https://booklog.kinokuniya.co.jp/booklog/handaishosekika/archives/2013/10/post.html）, 2024-02-04参照.

高石　恭子（2020）『自我体験とは何か：私が〈私〉に出会うということ』, 創元社.

村田沙耶香（2022）『信仰』, 文藝春秋.

Gilligan, C.（1982）, *In a Different Voice: Psychological Theory and Woman's Development,* Cambridge Mass: Harvard University Press.
＝キャロル・ギリガン（2022）『もうひとつの声で―心理学の理論とケアの倫理』（川本隆文・山辺恵理子・米典子訳）風行社.

Gilligan, C.（2011）, *Joining the Resistance.* Cambridge, UK Malden, Massachusetts: Polity Press.
＝キャロル・ギリガン（2023）『抵抗への参加―フェミニストのケアの倫理』（小西真理子・田中壮泰・小田切建太郎訳）晃洋書房.

（よしだ・ゆうか）